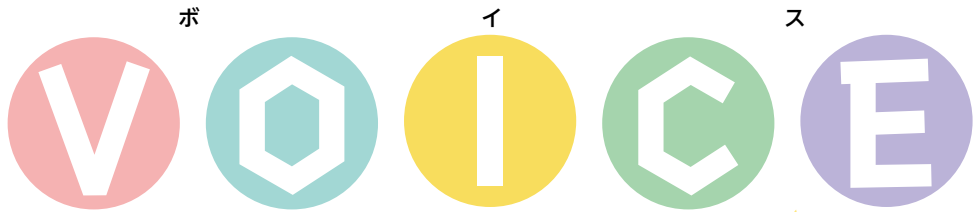


酪農



日本酪農の
最前線的话题を
ご紹介



世界的な食糧事情から見た日本の酪農及び牛乳乳製品市場について — 牛乳価格値上げとその背景 —

はじめに

日本の酪農はいま、飼料価格の高騰と円安進行などを背景に、2008年に続く経営危機の状況にあります。生産コストの上昇などにより酪農家の廃業が続く、日本国内の生産基盤は縮小し、牛乳乳製品市場は輸入酪農製品の割合が高まっています。これら環境変化は、酪農家の生産性向上努力をはるかに超えるスピードで進んでいます。

こうした酪農の現状を背景に、10月より、牛乳の卸売価格の値上げが行われることになりました。そこで本稿では、日本の酪農を取り巻く環境変化について解説してみたいと思います。

● 世界の食糧市場の ステージが変わった

日本の酪農は、飼料の7割以上を輸入に依存しています。このため、海外の食糧市場の影響を日本の酪農は大きく受ける構造にあります。特に、生産コストの大きな割合を占める飼料費は、主要原料であるトウモロコシ価格に左右されます。

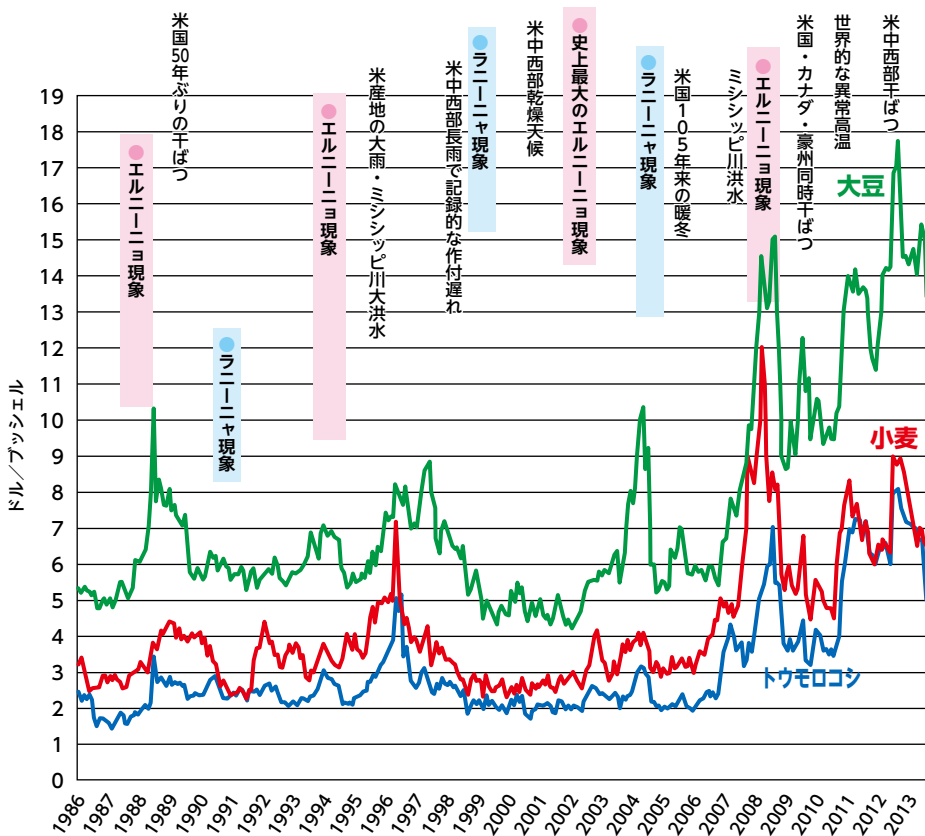
ちなみに、日本は毎年約3000万トンの穀物を輸入しています。このうち、トウモロコシが約1600万

トン（うち飼料用1200万トン）、食用小麦約550万トン、飼料用麦200万トン、大豆300万トン、コメ80万トンなどです。しかし、2007年以降、これら海外の穀物

価格が急騰しています。正確には急騰後、急落もしていますが、過去と比べると下値が着実に切り上がっています（図1）。これをどう判断したらよいのでしょうか。

（株）資源・食糧問題研究所 代表 柴田明夫

（図1）シカゴ穀物相場



（出所：シカゴ商品取引所データより筆者作成）

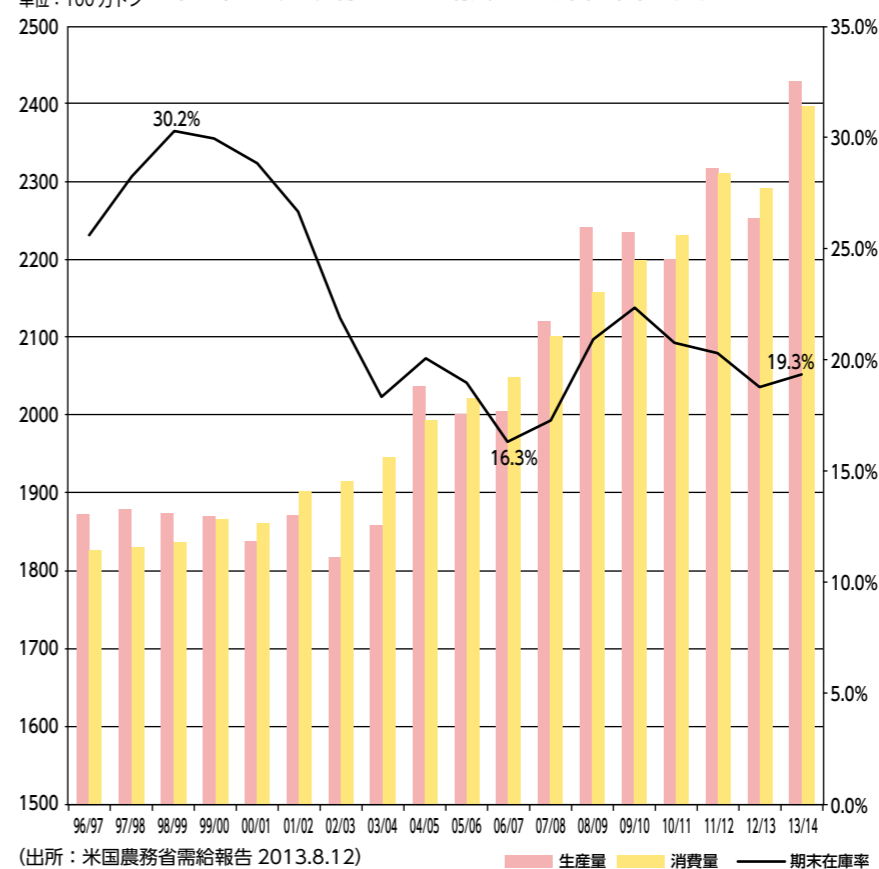
筆者は、今世紀に入って世界の食糧市場のステージが変わったとみています。

アメリカ農務省(USDA)によると、1990年代後半まで18億トン台で推移していた穀物の生産・消費規模は、2000年以降、拡大基調を辿り2013～14年度(13年後半～14年前半)には24億トン前後に達する見通しです(図2)。価格が史上最高値水準にあるにもかかわらず

消費が減らないのが特徴です。背景には、世界人口の増加に加え、中国はじめ新興国の食生活の向上に伴う食用油や飼料用穀物需要の拡大があります。生産も飛躍的に拡大しているものの、異常気象が頻発するなか、増産を繰り返しながらの拡大であり、生産が消費を下回れば世界在庫が取り崩され、そこに投機マネーが流入する格好となります。

「安ければ良い」という意識をぜひ改めていただきたいと強く思います。

(図2) 世界の穀物生産量・消費量&期末在庫率の推移



「安ければ良い」という意識をぜひ改めていただきたいと強く思います。

平成25年度 酪農教育ファーム認証牧場とファシリテーターの募集を開始!

「酪農体験を通じて食といのちの学びを支援する」を目的に活動する酪農教育ファームは、酪農の多面的な機能のひとつとして注目されています。口蹄疫や東日本大震災で減少傾向にあった認証牧場の受け入れ数も徐々に回復し、平成24年度は年間で83万人が体験しました。酪農教育ファームが組織的に活動を始めて13年目を迎え、現在、301牧場、560名のファシリテーターが酪農教育ファーム活動に参加し、活躍しています。この機会に、ぜひあなたの参加をお待ちしています。

募集は地域により異なりますので、詳細は各指定団体にお問い合わせください。

認証研修会のご案内

平成26年1～2月に、東京、札幌、大阪で開催を予定しています。日程は1泊2日で、1日目終了後には、全国の酪農家や関係者と懇親を深めていただくために、懇親会も予定しています。

認証までの手順



* 認証牧場は「場」、ファシリテーターは「人」の認証です。両方合わせて認証もできますし、ファシリテーターのみの認証も可能です。

お申し込み方法

認証牧場認証申請書、ファシリテーター認証申請書に必要事項をご記入の上、お申し込みください。

* 申請書類に関しましては、酪農教育ファームホームページよりダウンロードしていただくか、事務局までお問い合わせください。

<http://www.dairy.co.jp/edf/>

お問い合わせ先

一般社団法人中央酪農会議

業務部/佐藤・星井

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-1-12 コープビル9階

TEL: 03-3219-2611 FAX: 03-3219-2622

市場への参加者も増えました。1990年代までの伝統的な穀物輸出国である米国・カナダ・豪州に、ブラジル、アルゼンチン、ロシア、ウクライナなどが加わりました。輸入面では、従来の主要輸入国の日本、韓国、台湾に加えて、中国が世界最大の穀物輸入国として登場しています。これまでのような先進国同士での取引であれば、情報は透明であり需要もほぼ予測ができました。

しかし、新興国の参加により市場は不透明になり、投機マネーの流入余地が広がりました。特に、2001年のWTO(世界貿易機関)加盟を契機に中国の大豆の輸入が急増しています。1999年に1000万トン強であった輸入量は、2013年には6900万トンと過去最大となる見通しです。トウモロコシも増加して700万トン、コメ350万トン、小麦は今年950万トンの輸入国となる見通しです。この延長では早晩、日本と中国などでの食糧輸入競争が強まる可能性が大きいといえます。

5ドル、3ドル、2ドルを中心に推移してきました。しかし、今世紀に入って価格水準は3倍前後に切り上がり、「新たな均衡点」を探る動きがあります。

これに伴い、世界的な農業開発ブームが起こっています。その特徴は、商品化(より儲かる穀物を作付けする)、装置化(大規模な灌漑設備、機械化(大型機械の導入)、情報化(データ管理)、化学化(農薬・肥料の多投入)、バイテク化(遺伝子組み換え種子の導入)などです。それは言い換えれば、農業の脱自然化であり、特定の作物を生産する単作化(モノカルチャー)の進展でもあります。

しかし、農業は自然の領域に深く関わるものです。気掛かりなのは近年、農業開発ブームに伴い食料生産のフロンティアが急速に拡大するなか、地球温暖化、異常気象、水不足問題、生物の多様性喪失(多様な種の減少)など、食糧市場が自然のリスクにさらされるようになったことです。

● 日本の酪農を見直せ

日本は、これまで食糧に関しては「安い価格」、「安全な品質」、「安定した供給」を同時に享受することができました。しかし、ここ数年の穀物価格の高騰とその背景にある中長期的な需給の逼迫により、「3つの安

酪農教育ファームオープンファーム募集!!

登録制度で活動を支援

消費者交流活動を行う牧場の皆さまに「酪農オープンファーム」を紹介します。この制度を利用して、オープンファームとして登録すると、本会議から交流に関する情報や活動支援ツール、情報交流の場などを提供します。さらに、交流活動で気になる感染症防疫についても、中央酪農会議で策定したマニュアルをご案内します。ぜひ、この機会に登録をお考えください。詳細は右記宛お問い合わせください。 一般社団法人中央酪農会議/業務部 担当:佐藤・星井 TEL:03-3219-2621